

降臨節第1主日 マタイ24章37―44節

〔直訳〕

- 37 なぜなら ちょうどように ノアの日々が、  
そのように あるだろう 人の子の到来は。
- 38 なぜなら ように 人々はあつた  
「それらの」日々の中で、 洪水の前の  
食べながら そして 飲みながら、  
めとりながら そして 嫁ぎながら、  
日まで、 ところの 入った ノアが 方舟に、
- 39 そして 人々は理解しなかった  
ときまで、 来た 洪水が  
そして それが奪つた すべての人を、  
そのように あるだろう 「また」 人の子の到来は。

- 40 そのとき 二人が あるだろう 畑の中に、  
一人の男は 連れて行かれる、  
そして 一人の男は 残される。
- 41 二人が 挽いていて 挽き臼で、  
一人の女は 連れて行かれる、  
そして 一人の女は 残される。

- 42 それで 目覚めていなさい、  
というのは あなたがたは知らない  
どの 日に あなたがたの主が 来る。
- 43 だが これを 理解しなさい 次のことを  
もし 知っていたら 家の主人が  
どの 夜警時間に 盗人が 来る、  
目覚めていたであろう  
そして 許さなかったであろう 彼の家が穴を開けられることを。
- 44 それだから あなたがたも いなさい 備えて、  
というのは あなたがたが考えない時間に 人の子は 来る。

〔新共同訳〕

- 37 人の子が来るのは、ノアの時と同じだからである。 38 洪水になる前は、ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていた。 39 そして、洪水が襲つて来て一人残らずさうまで、何も気がつかなかった。人の子が来る場合も、このようである。
- 40 そのとき、畑に二人の男がいれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。 41 二人の

女が臼をひいていれば、一人は連れて行かれ、もう一人は残される。

42 だから、目を覚ましていなさい。いつの日、自分の主が帰って来られるのか、あなたがたには分からないからである。43 このことをわきまえていなさい。家の主人は、泥棒が夜のいつごろやって来るかを知っていたら、目を覚ましていて、みすみす自分の家に押し入らせはしないだろう。44 だから、あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである。」

### ①ノアの日々（過去）

④ 第一段落（37―39節）は最初と最後に、「人の子の到来」が置かれ、囲い込む形になっている。第三段落（42―44節）も「あなたがたの主は来る」と「人の子は来る」によって囲い込まれている。このことから、この箇所のも主题是「主の再臨」であることが分かる。

### ⑤「人の子」

旧約聖書では単純に「人間」を意味することが多い。しかし、新約聖書ではメシアであるイエスの称号として、「ダビデの子」や「神の子」とともに用いられる。ダニエル書などの黙示思想は、神の意思が行われず、罪人が支配している今の世が神によって速やかに駆逐され、義人に至福の生活の場が与えられる終末が到来するという緊迫感に貫かれている。ダニエルは民の代表であり諸国民をうち破る者としての「人の子」の到来を幻のうちに見る（ダニエル書7章13―14）。黙示文学とは異なり、新約聖書の「人の子」は世俗的なメシアではなく、現世でいったん捨てられた後に栄光を受けて人々を救うために来臨するとされている。イエス自身が実際にこれを自称していたかどうか、史実の問題としては大いに議論されているが、弟子たちがダニエル書7章などの黙示文学の表象をイエスに当てはめ、そこからイエスに対する理解を深めていったのは確かである。

### ⑥「ノア」

ノアの時代に「地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを」主は見て後悔し、「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう」と、洪水によって地上から人を滅ぼそうとする（創6:5―8参照）。しかし、その世代の中でただ一人神に従う無垢の人であり、神とともに歩んでいたノアは主の好意を得て洪水から逃れることができた。

### ⑦「まで…ときまで」

「食べながらそして飲みながら、めとりながらそして嫁ぎながら人々はあった」という表現は継続する動作を生き生きと描写する構文。人々は「食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり」しながら、日々を楽しんで滞りなく生きていた（創6:5以下参照）。洪水が起こる前のこのような生活は「ノアが方舟に入った日まで」続いた。「ノアが方舟に入った日まで」は、39節では「洪水が来て、すべての人を奪ったときまで」と言い換えられている。この二つの句が対応しているなら、「食べたり飲んだり、娶ったり嫁いだり」という行為は、39節の「理解しなかった」に対応することになる。「食べたり飲んだり、娶ったり嫁いだり」という生活は、同時に、人々が「理解しなかった」生活でもあった。

### ⑧「理解しなかった」

この動詞には目的語がない。新共同訳は「何も気がつかなかった」と訳しているが、このように訳すと、洪水が来ることにまったく気づかなかったという意味になり、洪水が不意に襲ってきた

ことが強調されるだろう。人々はいつ洪水が起こるかを知らなかった。洪水は、人間には計り知れない神の思いによって起こされる出来事であるから、人間は洪水が襲って来ることに、それがいつ起こるのかも気づくことはできない。彼らは、すべてを滅ぼす洪水をいつでも起こすことのできる神の権威を「理解しなかった」のである。ノアの日々のように、人の子が到来する時にも、同じように人々は神の権威を理解せず、神を畏れない生活を送っている。

## ②神の識別（未来）

### ①「連れて行かれる」「残される」

ノアの洪水では、善人と悪人が神の目によって区別されているが、人の子が到来する時、畑で働く二人の男や、臼を挽く二人の女の間には善悪の区別は述べられていない。しかし、彼らの結末はそれぞれ、一人は「連れて行かれ」、一人は「残される」と受動態で表されている。この受動態には「誰によって」が書かれていない。このような受動態は、その行為が神によるものであることを示す（神的受動態）。畑で働く二人の男や臼を挽く二人の女の間にある善悪の区別は、人間の目には分からない。人間の目には同じように見える二人であるが、神の目はその違いを見分けて別々の運命を与える。神を覚えて生きているかどうかを神は見極めることができるからである。ノアの時と同様に、神に従わない人は、人の子によって連れて行かれることなく、滅びの中に置き去りにされる。

### ②「連れて行く」

「一緒に連れて行く」を意味する語。ヨセフは夢で主の天使が告げたとおりに、幼子とその母を「連れ」て、エジプトへ逃れた（マタ二13・14）。ご変容のとき、イエスはペトロとヤコブとヨハネだけを「連れ」て、高い山に登る（マタ一七1）。この箇所「一人は連れて行かれ」は、24章31節の「天使たちは、天の果てから果てまで、彼によって選ばれた人たちを四方から呼び集める」と関連している。ほかには、この語は御国や伝承や教えを「受ける」の意味でも用いられ（ヘブ一二28、1コリ一五3、2テサ三6ほか）、さらに同意や承認に強調点が置かれることもある（ヨハ一11、1コリ一五1、フィリ四9）。ここでも「人の子に連れて行かれる」とは単なる移動ではなく、その人の信仰が認められていることを暗示しているのかもしれない。

### ③「残す」

この語には「放っておく・そのままにする」という意味がある。従って、借金を放っておけば「帳消しにする」の意味になり、罪を放っておけば「赦す」ことになる。ここでは人を放っておくので「後に残す、置き去りにする」の意味になる。イエスは弟子たちに「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない（みなしごとして後に残さない）」と語っている（ヨハ一四18）。

## ③目覚め、理解し、備える（現在）

### ①「夜警時間」

夕方6時から朝の6時までをローマ式に四等分して夜警時間を表した。例えば、マタ14章25節「夜が明けるころ」の直訳は「夜の第四夜警時間に」となり、午前3時から6時を指している。

### ②「目を覚ましていなさい」

イエスの到来と共に時代が変わる。闇が支配する夜は終わり、救いの夜明けが始まっている。この昼を生きる者は目覚めている。24章45節以下、25章1節でも終末のテーマが続く。

◎目覚めて、備えていなさい

第一段落で過去を想起させ、第二段落では将来起こることを描き出した後、第三段落ではそれに向かう現在に注意が向けられる。「目覚めていなさい」(42節)、「備えていなさい」(44節)は、どちらも直後に「というのほ…」と理由が述べられていることから見て、対応関係にある。なぜ目覚めて備えることが必要かという点、主はいつ来るかを知らず(42節)、しかも主は思いもよらない時に来るからである(44節)。

④理解しなさい

主がいつ到来するのかについて、人はまったく知ることができない。しかし、その二つの勧めの間には「理解しなさい」(43節)という呼びかけがある。何を理解すべきなのかを後に続くとえが説明する。家の主人は、盗人がいつやってくるのかを「知っていたら」、そのときに備えて待ち、盗人の侵入を防ぐことができる。しかし実際には、主人はその時を知らないのぐつすり寝込み、盗人の侵入を許してしまう。この主人の姿はノアの時代の人々の姿に重なる。43節「理解しなさい」は39節「理解しなかった」と同じ語。

◎「知らない」ことを理解する

主の到来が盗人の侵入にたとえられているが、比較のポイントは、それがいつ起こるのかを知ることができないということにある。神の働きがいつ起こされるのかを人間は知ることができない。人が滅びへと追いやられるのは「いつであるかを知らない」からではない。「知らない」ことを理解していないことが、滅びの原因となる。その時を知るのは神だけである(36節参照)。人間はその時を知らない。いつでも終わりの時を起こすことのできる神の権威を認めているなら、私たちは「目覚めて、備えて」いることになるはずである。

#### ④イザヤ2章1―5節

1 アモツの子イザヤが、ユダとエルサレムについて幻に見たこと。

2 終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち

どの峰よりも高くそびえる。

国々はこのぞって大河のようにそこに向かい

3 多くの民が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

4 主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず  
もはや戦うことを学ばない。

5 ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

① 「主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち」

神殿の山がシオンを指しているのは、3節から明らかである。多くの民が「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される」と言って押しかけるけれども、その主の教えは「シオンから…出る」と歌っているからである。

② シオン

エルサレムにある丘の名前。エルサレムはダビデが獲得した後、イスラエルの町になるが、もとはエブス人と呼ばれるカナン人のもので、その丘がシオンと呼ばれていたと思われる。次第に町が拡大すると共に、エルサレム全域、あるいはその住民を表す言葉になり、さらには神殿のある山を指すようになった。「シオン詩編」とはこのシオンの丘を歌った詩編を指す。これらの詩編の多くは、終わりの日に諸国民が集う場所としてのシオンを歌っているが（詩46・48・76）、神の住居として選ばれた場所として（詩87など）、あるいは巡礼の場所として歌う詩編もある（詩84・121など）。シオンとは民が神とまみえるための場所としてうたわれている。

③ 「高くそびえるシオンの山」をテーマとする詩編

その代表は詩編48である。

2 大いなる主、限りなく賛美される主。

わたしたちの神の都にある聖なる山は

3 高く美しく、全地の喜び。

北の果ての山、それはシオンの山、

力ある王の都。

4 その城郭に、砦の塔に、

神は御自らを示される。

この詩編ではシオンの山が「北の果ての山」とされているが、それは奇妙である。この詩編もイスラエルの住民が歌っているはずだが、シオンの山は決して「北の果て」に位置してはいないからである。カナンの詩では「北の果ての山」が、ギリシアのオリンポスと同様、神々が集う山を指す神話的表象として用いられている。詩編48の作者はカナンの詩に登場する「北の果ての山」を知っており、それをシオンの山に移し替え、真の「北の果ての山」はシオンである、なぜなら、真の神が臨在するのはシオンだから、と主張していると思われる。そうであれば、ここでの「北」は方位を表すのではなく、世界を支配し、それを導く神が臨在する場所を意味していると思われるべきだと考えられる。

④ 「諸国民の巡礼」

世界にそびえる「神の山」という表象のほかに、「諸国民の巡礼」というテーマが見られる。いずれもカナンから借用した概念であり、両者が巧みに組み合わせられている。「諸国民の巡礼」と

いうテーマも周辺諸国に見られるが、どの民族も自分たちの信じる神こそ真実の神であり、それを知った他国民が宝物を携えて参詣すると期待している。

㉓ シオンを訪ねる目的

イザヤ2章の特徴は、諸国民が主の山を訪ねる目的にある。彼らは献げ物をささげて祭りを祝うために来るのではなく、むしろ「主はわたしたちに道を示される。…その道を歩もう」(3節)とあるように、「シオンから出る」教えに聞くためである。その教えに耳を傾けるとき、諸国の間から争いが完全に姿を消し、「剣を打ち直して鋤とする」日が到来する。そうであれば、シオンを「どの峰よりも高くそびえる」(2節)山にするのはこの教えである。シオンは諸国民からの尊敬を受けるような、威厳に満ちた高い山ではない。およそ目立つことのない山であるが、シオンを諸国民の巡礼地としたのは、山の容姿ではなく、そこに「自身を現す神の偉大さ」である。

㉔ その道を歩もう

神が教える道とは、国々の間での争いを治めるための手段や方法のことである。諸国民がエルサレムを訪問するのは、神を賛美するためでなく、神からの教示を請い、神が示した教えに従って歩むためである。従って、シオンの聖所を訪れる諸国民は、必ずしもイスラエルの神YHWHへの帰依やその民となることを強要されているのではない。

㉕ 「彼らは剣を打ち直して鋤とし…もはや戦うことを学ばない」

諸国民の第一の目的は、「国々の争い」を正しく裁く主に聞くためであり、「もはや戦うことを学ばない」時代へと進むためである。YHWHが下す決定を諸国民が受け入れるとき、武器が不要となり、農具に打ち直される。それほどに絶対的な平和が到来する。戦争はもはや対決の手段ではなくなる。

⑤ 神の権威を理解して生きる

㉖ 37・39節はキリストの再臨を「到来」という言葉で表している。この言葉は皇帝の「行幸」を表すのに用いられるが、キリストの再臨こそが、まことの王の行幸であり、救いの日にほかならない。教会は降臨節の最初に、キリストの再臨を述べる福音を選んでいるが、キリストの降臨(最初の到来)を祝う者は、キリストの再臨(二度目の到来)を待ち望みながら生きて行くことを示しているのだろう。

㉗ キリストの再臨を待ち望む者は「目覚め、理解し、備えて」生きることになる。主が来る日がいっつであるかは分からない。それを知るのは神だけである。すべてを始め、すべてを終わらせることのできる神の権威を「理解する」とき、人は「目覚めて、備えて」生きることができる。滅びに落とされるという不安があるから「目覚めている」のではない。救いを確実にもたらす神に信頼しているから、その神の支配に畏れを持っているから「目覚めて」、現在から目を逸らすことなく、今の生活を意味あるものとして生きる。

㉘ 神への信頼は、イザヤ書が語るように、「神からの教え」を聞いて、神の示す道に従うという生き方となる。すべての者が神の教える道を歩むなら、剣も槍も必要としない絶対的な平和が訪れる。神がもたらす平和が必ず訪れると信じるとき、人は今を生きること集中することができる。とイザヤは捉えているのだろう。救いも平和も神が必ず与えてくれるという全幅の信頼が、今を生きる力となる。